



ラグジュアリーな羅針盤

COMPASS
OF LUXURY

空海と秘仏が照らす、ラグジュアリーの原点

豪華さは、人知を超えた存在へ差し出すために必要とされたのです。

同じ発想は西洋にもあります。12世紀、パリ郊外サン・ドニの修道院長シユジェールは、貴い素材と光が精神を物質から非物質へ導くと考え、聖堂に金や宝石、ステンドグラスをふんだんに用いました。宗教は、同時代最高の技術に対する最大の発注者でもありました。寺院の需要が木彫、漆、截金、金工を育て、西洋では聖遺物容器や祭具が金銀細工を発達させました。聖なるものへの奉獻によって磨かれた技術が、やがて宮廷や世俗の奢侈へ渡っていったのです。ラグジュアリーの源流の一つには、超越的なものへ最上の技を捧げる営みがありました。

密教が欲望を単純に敵視しなかったことも興味深いところです。山梨・放光寺の重要文化財《愛染明王坐像》は、弓を天へ向けて引き絞る「天弓愛染」という珍しい姿をとります。愛欲や執着を消し去るのではなく、その激しい力を悟りへ向け直せ、と示しています。禁欲ではなく、方向転換です。

仏像の威光は、見せないことによっても守られてきました。秘仏は日常の視線から隔てられ、なかには数十年に一度しか開帳されない像もあります。現代でも供給制限で希少性は作られます。ただし、それは売るための演出です。秘仏が隠されてきたのは、簡単に消費させないためでした。だから開帳は、長く隔てられてきた存在との「対面」になります。見られない時間そのものが、像の力を蓄えてきたようにも感じられました。

守るために隠す。伝えるために開く。宗教はその緊張を、1200年かけて調整してきました。現代のラグジュアリーが学ぶべきなもの、希少性の演出ではなく、価値を即座に消費させないための時間と節度なのかもしれません。

天弓愛染はいまも矢を天へ向けています。欲望を捨てよとは、言っていません。問われているのは、その力をどこへ向けるのか、ということなのでしょう。

中野香織

富山市出身。服飾史家。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。最新刊『エレガンス入門』（ちくまブリーマー新書）。パレスホテル東京のファッション文化ツアーつき宿泊プランTokyo Fashion Chroniclesの監修を務める。



弘法大師生誕1250年を記念し、真言宗十八本山と関係寺院から88件の名宝を集めた「空海と真言の名宝」展を鑑賞しました。88という数は、四国八十八カ所にちなみます。

間近に見る仏像は莊嚴そのもので、なかでも国宝《五智如来坐像》には空間をまるごと異次元に持ち上げるような迫力があります。9世紀、京都・安祥寺に伝わる木造漆箔の仏像で、5体がそろった現存最古の例です。中央の大日如来を4体の如来が囲み、曼荼羅の宇宙が立体となつて現れます。時空を超えた仏像が放つ気配が、問答無用に心を射ぬきます。

空海は、唐から持ち帰った品々を記した『御請来目録』に、密教の深い意味は文字だけでは伝えがたいため、図画を用いて示す、という趣旨の言葉を残しています。金、漆箔、截金、香、音、光、厳密な所作。それらは、目に見えない世界へ近づいたための方法そのものでした。

愛染明王坐像（平安時代、12世紀）。
甲斐源氏の安田義定（やすだよし）が
が創建した山梨・放光寺に伝わる



五智如来坐像（平安時代、9世紀）。
空海の孫弟子・恵運（えうん）が建てた
京都・安祥寺（あんしょうじ）の創建期に
さかのぼる初期密教彫刻の代表作。



「空海と真言の名宝」展は、東京
国立博物館にて9月6日まで開催